

超大国アメリカの素顔

久保文明編著
久保文明編著

ウェッジ
1,400円＋税

本書は政治、軍事、宗教、医療、経済、文化など米国全般に亘って簡潔ながら的確な実像を描いた名著である。

久保文明は、米国の政治制度の成立過程の特異性について歴史を踏まえて指摘し、連邦制、大統領制、議会、政党、ロビイストなどについて日本との比較を意識しながら簡潔に述べている。

江畑謙介は、米国が第二次大戦を経て軍事強国となり、冷戦後は他の追随を許さない超大国になったこと、しかし2001年の9・11同時多発テロ以降、「米軍再編」を余儀なくされて行く過程を、日本の状況を絡めながら述べている。

森孝一（本学神学部教授）は、



思文閣出版
1,900円＋税

敢えて風雪を侵して 新島襄を語る(四)

本井康博（大学神学部教授）著

本井康博の「新島襄を語る」シリーズは早くも第四集。今回も軽快な語り口で、著者の文献渉猟、博引旁証がまた楽しい。

本書はまず、新島襄がもつ文化的二重性の観察から始まる。上州安中藩出身で、神田が生まれ育ちの新島が、21歳のとき家出してボストンへ。10年後、日本の武士がアメリカの宣教師となって帰国する。これを著者は「上州系江戸っ子」が「ポストニアン」になったと形容し、襄への改名にも言及して、新島の体内の和洋文化を解剖する。

新島襄は梅が好きだった。44歳のとき、梅を見に奈良の月ヶ瀬に赴き、騎鶴楼に投宿した。



世界思想社
2,200円＋税

解放のソーシャルワーク

横田恵子編

本原活信（大学社会学部准教授）他執筆

本書は日本のソーシャルワーク実践・教育の根幹を問う直し、画期的とも言える提言を投げかけている。福祉実践のなかで、あるいは福祉理論で、人間の解放という視点が欠落しているのではないかと説く。社会や制度に批判的な目を向けるクリティカル・ソーシャルワークがそれほど強調されない日本の福祉界にとって極めて新鮮かつ重要な視点である。本書は5人の研究者がそれぞれの立場から論考を寄せているが、著書の題名でもある「解放のソーシャルワーク」という章で、本原は解放の概念を丁寧に説き、福祉実践との結びつきを提唱する。

特に「解放の神学」を福祉の分野に応用するという点が興味

政教分離の米国が実はきわめて「宗教的」な国家であり、多民族国家の統合のシンボルとして「聖書の神」が必要であると主張する。この米国型宗教の特質は憲法修正第1条によってすべての宗教的立場に平等な権利を与える一方、同時に「見えざる国教」によって多様な米国の統合することにあると指摘し、この2つの間を揺れ動く「綱渡り」的あり方こそ特質であると結論づけている。

天野拓は、「医療研究大国」における国民皆保険制度の不在、4600万人以上の無保険者の存在、独特な民間保険の存在、生命倫理問題の政治的争点化など、米国医療の特質と現状を浮き彫りにしている。

最後に久保、小林慶一郎と渡辺靖の3人が経済と文化について米国の実像に迫っている。

本書は読みやすく、重要な点の確かつ簡潔に展開し、米国の「素顔」を知るための格好の入門書といえよう。さらに理解を進めるための基本的な参考文献が提示されていないのが惜しまれる。

細谷正宏（大学アメリカ研究科教授）



ミネルヴァ書房
7,500円＋税

中国をめぐる安全保障

浅野 亮（大学法学部教授）他編著

本書は今日の中国を「伝統的安全保障」の視点から分析した共同作業の産物である。

本書は現代の安全保障が多面的性格を帯びるようになっており、経済や社会の側面を含む「非伝統的安全保障」の視点が重要になってきていることを認識している。しかし、同時に本書は、非伝統的な安全保障に注目が集まるあまり、軍事的側面を持つ問題が軽視されるようなことがあったならば、「最悪のシナリオを想定しない対外政策が展開されることになり、過度の楽観が最悪の結果をもたらす可能性が大きくなる」（3頁）

宿帳には「頭斬髪、色白キ、髯アリ」云々と、新島の人相が記されていたという余聞まであるが、著者は生徒の深井英五に贈った漢詩の「寒梅」に、「庭上の「寒梅」を重ねて、そこに「百川を挽回するの英気」を読み取り、さらにその先に、新島はキリストの生き方を見つめていたのだと分析する。

また、ジェーンズ不倫疑惑騒動では、あらぬ疑いをかけるなと恩師ジェーンズを擁護して、アメリカン・ボードの宣教師たちを批判した熊本バンドの後日談。あるいはアーモスト大学の名誉法学博士の学位授与に、最後まで逡巡しつづけた新島襄の表情など、逸聞の数々が並ぶ。

昔は新島襄といえば伝説の域を出なかったが、著者は新島の実像を求めてとことん史料を漁る。現在の同志社の新島研究者たちが生み出す成果とも相俟って、今や人間新島襄の、具象の細部がよく見えるようになった。

工藤弘志

（元大学キリスト教文化センター教員）

というパラドックスにも読者の注意を喚起している。

「中国の軍力は脅威であるか？」というよくある問に対する本書の答は、「軍力はまず相手に脅威を与える最も重要な強制力の一つであり、その保有は他国にとって脅威でないわけがない」（7頁）という明快なものである。こうした認識にもとづく本書は、中国の軍力とありのままに捉えることに努力を傾注している。

上述の認識はまた、他国の軍力に中国に影響を与え、中国の軍事的対応をひきだす過程も視野に含む。本書が中国をめぐる安全保障環境の考察に多くの紙幅を割いているのはそのためである。本書はさらに、中国の軍力を支える経済・資源についても分析を行なっている。

以上の特色をもつ本書が「伝統的安全保障」の視点からの現代中国論の基礎文獻の一つとなるのは確実であろう。

小笠原高雪（山梨学院大学教授）

承認欲求

東洋経済新報社
1,500円＋税

承認欲求

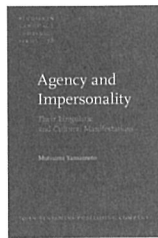
太田 肇 (大学政策学部教授 著)

本書を読んでまず驚かされるのは、「承認欲求」に関わる先の2冊とは、かなり異なる角度から考察されている点である。「違う本だから当たり前」と思われる方も多いと思うが、実はこれがあまり当たり前のことではないのだ。本書のように、同じ著者が同じテーマを掲げて連作した本は決して少なくないが、その多くは、残念ながら、「柳の下に……」ではないが、前作で述べられた結論が再度繰り返されているに過ぎないものが多い。通勤電車の中でずっと読めてしまう。あまりにずっと読めてしまうので「あれっ」と思

ってしまふ。何のことはない、同じものを前にも読んでいたからである。太田先生の本は引かかる。読んでいて「そうかな?」「なぜ?」と前のページを読み返してみる。あるいは、丁寧な活字を追いついてみる。本書でも、いくつかの箇所ですり止まり考えさせられた。

もちろん、難解な本ではない。このような「難所」では、身近な事例が配されている。あるいは、「このようにいうと、ほめられることが負担になりモチベーションを低下させるという話(第3章)を思い出して、「整合性がないではないか」と反論する人がいるかもしれない」(p.199)のように、読者に反論の機会を与えてくれる。読者の心の動きを読んで巧みに先回りする、こんなところに「太田作品」の支持される理由があるのかもしれない。まずは、本書を手に取り、確かめてみていただきたい。

久保真人 (大学政策学部教授)

John Benjamins Publishing Company
\$107.00—\$140.98

Agency and Impersonality

山本 睦 (天学言語文化教育研究センター准教授 著)

主語がない表現がよくある日本語、ほとんどの場合主語を必要とする英語。この違いはどこから来るのか。何か訳があるに違いない。

本書は、主語の省略を含む「エージェント」とインパーソナリティー(動作主性と非人格化)にかかわる問題に、言語学的側面からだけでなく、哲学、比較文化的側面からも考察を加え、私たちの世界観の持ち方を解明しようと試みる。意図性と有生性に基づいた動作主性は、異なる言語・文化において表出の仕方が異なる。日本語では非人格化を招き、動作主は

省略されるが、著者は「これは語の構造的な問題だけによるものではなく、社会文化的な文脈の中で動作主がどのような位置を占めるかがポイントとなる」としている。このような考察が、日英語の比較だけではなく、エストニア語、フィンランド語、アイルランド語等との比較に基づいている点は注目すべき点である。さらに言語の構造と思考習慣との関係を、集団主義・個人主義の観点から見直し、言語相対論(サピア・ウォーフの仮説)に新たな解釈を与えている点は高く評価される。

「日本語では主語を曖昧にし、英語では主語を際立たせる傾向があるが、これは母語話者の現実世界の切り取り方の違いにある」ということが見えてきた。尚、動作主性を支える有生性については、同モノグラムのシリーズに収められた前著「アニマシーとレファレンス(有生性と指示性)」を併せて読むことをお勧めする。

寺西隆弘 (天学言語文化教育研究センター講師)

角川書店
1,400円＋税

くくしがらば

遠藤 徹 (天学言語文化教育研究センター教授 著)

『姉飼』で第10回ホラー小説大賞を受賞した著者による新刊小説、と聞けば、おどろおどろしい内容を想像されるかもしれないが、本書の扉を開けてみればそんな不安も一掃され、芋蔓式に畳み掛けられる、本気と冗談をまぜこぜにしたような言葉の海の中に漂う幸福感を味わうことができるだろう。物語は有間温泉駅前旅館皇女なるプリンセスを巡って展開される、まさに虚構そのものののだが、この小説を読む醍醐味は、その語り口そのもの、あるはずのない架空の世界を、文学からサブカルに至る様々なテキストのボキャ

阪急コミュニケーションズ
1,800円＋税

日韓企業戦争

—国際市場で激突する宿命のライバル—

林 廣茂 (天学ビジネス研究科教授 著)

長年韓国企業のコサルティンクに携わってきた著者の、日韓企業双方に対する熱い思いをよく表した著書である。読者は本を開くとすぐに、日韓企業の「船」に乗り、米国、欧州、アジア、中国、そして日本、韓国を縦横無尽に駆け巡る。今、日本企業という船に乗っていたかと思いきや、次の瞬間には韓国企業の船に乗り換え、かなたへ走り、こなたへ戻る。その船は自動車とデジタル家電という産業連関の頂点に立つ「海」(「産業」を進んでおり、時には相手の船とぶつかったり、あるいは嵐にあつたりしながら、少な

ブラリーを駆使して積み上げていく弁舌の冴えにある。初めは行き当たりばつかりに進んでいくようなストーリーも、幾組かの男女(ばかりでないが)が巧妙に配置される中、徐々にその全貌が明らかになり、最後には見事に大団円が到来する、となると、これはまさに一大ロマンスにほかならない。ちなみに「くくしがらば」とは、皇女の腹から生まれた地蔵のこと。その顔を見る者が岩と化すという皇女は、彼女の産みの母、ミカドの寵愛する側室の養女を失わせたことでミカド、即ち実の父親から亡き者にされようとするのだが……皇女の世話係のアキバ系少女やマッドサイエンティスト、更に皇女と恋に落ちるイケメンの新造人間も絡んで複雑化する事態を鎮めるのが地蔵の役目となる。著者ならではの地獄描写も織り込まれ、こつた煮詰めの展開が逆に爽快なファンタジーの新境地。

阿部範之 (天学言語文化教育研究センター講師)

くとも他の国の船を引き離し、レースの先頭を走っているようである。

本書は、豊富な二次資料に加えて著者自身が行ったアンケートおよび数多くのインタビューなどから、多量の情報量をきら星のごとく並べ、日韓企業戦争を見事に描き出している。もともと雑誌に投稿した論文を基にしているだけに、同じような内容が繰り返して出てくるが、それが「刷り込み効果」となって、日韓企業戦争の全体像を読者の頭の中にクッキリと映し出す。読者は、あたかも自分がそこにいるような臨場感を味わいつつ読み進めるであろう。

持論であるAI移転の論旨がやや霞んでいること、AI移転と対であったSAL移転は完全に背景に退いていること、国際研究機関の日韓企業共同設立への道筋が不明確なこと、が課題として指摘できるが、とにかく一読すべき本である。

大石芳裕 (明治大学教授)

新刊紹介

NTT出版
1,300円＋税

JR福知山線事故の本質
—企業の社会的責任を科学から捉える—
山口栄一（大学ビジネス研究科教授 編著）

2005年の新学期が始まって間もないときに生じたJR福知山線事故は、同志社人には忘れることができない悲惨な出来事である。国土交通省の航空・鉄道事故調査委員会はこの事故の調査結果を2007年6月末に発表した。本書はそれにほぼ1ヵ月先立って出版されたもので、著者による独自の観点に立つての事故の分析と共に、乗客の1人として重傷を負った宮崎千通子さんの事故の体験とリハビリについての手記が掲載されている。

調査報告書では、この事故は運転士が電車を減速させるタイ

ミングを失ったために生じたものであると断定され、その背景に、運転士の管理体制上の問題があったとされている。それに對し、著者は、時間遅れを取り戻そうとした運転士が減速することなくカーブを通過することによって時間を稼ごうとしたことにあるとする、異説を掲げる。運転士には科学的な手法で知ることができるとは限らない速度についての認識が共有されていないことと分析し、事故が生じる危険性についての知識を十分に共有させていない企業のあり方が事故の根源にあると指摘している。

本書は、技術経営には科学的思考をもとにした設計・運営が重要であることを説く著者が、その具体例としてJR福知山線事故を取り上げたものである。しかし、その指摘するところは、事故の本質に関わるものであり、定説を覆す注目に値するものである。

石黒武彦（大学ヒューマンセキュリティ研究センター主任フェロー）

ジェイ・キャスト
1,200円＋税

虫の知らせ

笠井昌昭（大学名誉教授 他執筆）

世の中には、おもしろい博物館があるものである。寄生虫博物館。当節、不思議なものが人を怖くするようである。携帯のストラップにも寄生虫のイメージキャラが採用されているとか。

九州国立博物館にも、ちょっと変わった逸品が所蔵されている。その名も、『虫の知らせ』という書名で、影印と解説付きで内容が紹介された。

大学の名誉教授笠井昌昭先生の軽妙洒落な解説「愛すべき虫たちと空想の世界—日本人は虫とどう向き合ってきたか—」、長野仁氏監修の本文紹介「針聞書」に描かれたハラノムシ、同氏による「針聞書」の成立・形態・鍼灸史上の位置づけを試みた「二戦国時代の鍼灸ムーブメ

ント 古来、ハリとムシとハラは因果な仲間」がおさめられている。

近世初期の写本で、鍼灸医が描いた腹中で病をおこす「虫」が63匹描き出されている。赤・青・黄・灰等で着色され、いかにもこんな虫たちに暴られたら、我々は降参するしかないというような不気味な姿である。癩癩持ちの人は、「肝積（かんしやく）」の虫に直面してみてもどうだろうか。気持ちが悪く着くかどうかは御本人次第だ。

不思議なもので人は、病気を引き起こす目に見えない「虫」たちを可視化することで退治できると思えて、安堵感を持つものである。これ自体、虫のいい話なのかもしれないが、宗教と科学が渾然一体であった「知」の働きによって作られた安心の世界である。いまや九州国立博物館の虫たちも、寄生虫博物館と同様に、かわいいフィギュアとしてショウアップに並んでいる。「虫」は、そうした安心の象徴として愛玩されるようにまでなったとも言える。

山田和人（大学文学部教授）

ハーベスト社
1,800円＋税

ケアと社交

—家族とジェンダーの社会学—
天木志保美（元大学文学部教授 著）

これまで産業化を支え発展させるのに貢献してきた職業、教育、家族のあり方が今、大きく揺らいでいる。本書は、こうした現実を直視して行き詰まりや不安をおぼえる私たちに新たな視点を提示する。新たな視点—それは、主婦を再考する視点である。

産業化により、家族は親族や職業から切り離され孤立した核家族となり、成人女性の家族成員は無償の家事労働を専門とする主婦として家庭内に一人囚われた。主婦は、経済的にも社会的にも夫に依存し、外部社会から孤立した存在であった……従来のごうした説明に対し、

本書は、家族と社会をつなぐものとして職業しか想定していないと批判する。そして、アメリカの社会学者リトウオクやイギリスの社会学者アラウの議論を丁寧なレビューし、隣人や友人、親族などインフォーマルな集団に目を向ければ、主婦が決して家庭外での社会関係を欠いていないことを示す。それどころか、核家族は、主婦のごうした社会関係によって遂行されるケアに依存して成り立っているという。

主婦は、育児や介護などケアを通して社会とつながっている。この点を強調するため、本書では主婦を「ケアラー」として捉えなおすことを主張する。それは、何かにつなぐ、職業的価値に基づく見地から話をしがちな私たちに必要な視点だと思われる。

本書は、社会学の専門書であるが、一般の読者にも分かりやすく書かれている。多くの方に、ぜひ読んでいただきたい。

片岡佳美（島根大学准教授）

エコノミスト社
4,800円＋税

リアルオプションとITビジネス

—基礎理論とケーススタディ—
加藤 敦（女子大学現代社会学部教授 著）

金融分野におけるオプションとは、特定の資産をあらかじめ決められた条件で将来のある時期に購入または売却できる権利をさす。リアルオプションは、1980年代に米国で発展した考え方で、金融オプション（選択権）の理論を実物（real asset）資産への投資意思決定に適用しようというアプローチである。

ITビジネスは、不確実性の高い事業分野である。ITの技術革新動向や価格変化という市場がもたらすリスクに加えて、システム開発の遅延やユーザーのスキル不足など、多くのリス

クを常に抱えているのが特徴である。他方、企業など組織におけるITへの投資は拡大を続けており、IT投資の持つリスクにいかに対処していくかが、大きな経営上の課題となっている。リアルオプションは、IT投資の持つ不確実性へ対処する一つの解を与えるものといえる。

著者は、我が国におけるIT分野におけるリアルオプション適用研究の第一人者である。本書は、リアルオプションをIT分野に適用していく上でのマネジメント上の要点を示すと共に、豊富なケーススタディを示し、理論に止まらず実務への適用の指針を示しているのが特徴である。難解な数式が駆使されるため敬遠されがちなリアルオプションであるが、数式を必要最小限に抑え、実務家にも読みやすい工夫がされている。

本書により、ITビジネス分野でのリアルオプション活用が進むことを期待したい。

藤原正樹（けいしんシステムサービス株式会社）



大塚秀夫

東京大学出版
3,200円＋税

新左翼の遺産

ニューレフトからポストモダンへ

大塚秀夫 (女子大学現代社会学部教員・教授)

第二次世界大戦後の先進諸国

で同時期に登場した新左翼とは何か。本書では、日本を代表する政治学者の著者が、知識人比較や国際比較を交えて明快に考察している。日本の新左翼の誕生、六〇年安保への関わり、崩壊を中心に、熱っぽく語られるが、分析はあくまで客観的でアイロニーにさえ富む。著者が六〇年安保直後の大学生だったという距離感からであろうか。

ラテンの遊び心をも持っていた日本の前期新左翼運動は、「彼らの同盟者であったかに見えた近代主義・モダニズムによって、敗退させられたこと」、その最大の「遺産」は「ポストモダン誕生の導火線を果たした

こと」とする結論は新鮮である。先進国で同時代的に「ポストモダンの運動」が形成される経緯は、英米仏の運動と比較して丁寧に検証されている。

著者は「ポストモダンの運動」の特色として、「社会に拡散し、可視性の低い」社会権力への関心を挙げる。新左翼の徹底した近代主義批判の思想と運動が、七〇年代のフェミニズムや環境運動はじめ、マイノリティ(少数民族、障害者、女性など)に対する「普通の人々」による差別、排除あるいは搾取について認識する社会風潮、思想を生み出したのだという。さらに、その流れが、新自由主義とも呼応して、日本での大学改革などさまざまな改革に繋がっているのだという。興味深い指摘である。

あわせて、本書は組織も個人も状況を見通すことは難しいものだと改めて教えてくれる。現在の課題と未来を考える際に、手掛かりとなる一冊である。米国の運動の詳細と日本の後期新左翼を焦点とした続編にも期待したい。

森田潤司 (女子大学生生活科学部教授)

日本放送出版協会
760円＋税31音
青春のこころ2007

「SEITO百人一首」の世界

同志社女子大学編

正直に言うとならば、このよう

な本を読むのが苦手である。全国の高校生たちが詠んだ青春の歌のアンソロジーである本書には、その青春の心が、文学的表現としても未熟なままに、つまりはテクニクによるフィルタもかけられずに、直に、生のままに書き付けられている。そのような表現に出会うとき、自らの青臭かった、あの恥づかしい青春の時代が否応なく思い出され、気持ちが悪くなるのは、私だけではない。

それは、文学の原初的体験と言え、文学の原初的体験と言い換えられるかもしれない。

自らの裸の内面を、他の人の目にさらすのである。恥ずかしいはずがない。しかし、たとえば短歌なら31音という形式の衣裳をまとうことにより、心理的抵抗はいくらか軽減される。文学的抵抗は、このように、私的なものを社会的なものへと置き換える工夫と技術によっても磨かれる。そこに、教育という要素が入り込む余地がある。

本書は、同志社女子大学が毎年行っている「SEITO百人一首」短歌コンクールの入選作品のうち、2004年から2006年の3年分を集めたものである。2006年度の応募数は12000人強、日本語短歌だけでも26000首を超えている。驚くべき数字である。

しかし、それにしても、これから若い心に忍耐強く、かつ温かくつきあう選者たちの苦労は、察するに余りある。教育の強い志がなければ、とてもなまなかにはできない仕事といえよう。

真銅正宏 (大学文学部教授)

大塚巧藝新社
1,800円＋税

新島真 中山道の旅

山田興司 (元中学校校長) 著

新島真は1882年の7月3日から11日にかけて、中山道を旅して、父祖の地、上州安中を目指した。五人の教え子が同行した。大津までは汽車、米原までは琵琶湖を航行する汽船、米原からは徒歩を主とし、時には人力車、時には馬車等を利用している。「日抄」と題する日誌に新島はこの旅の記録をどきどきと、本書ではそれを写真版で読むことができる。新島は歴史遺跡や芭蕉の句碑にも関心を示しているが、同時に将来のキリスト教伝道のための偵察という戦略的要素も日記の文言に見え隠れする。同行者たちと蕎麦

食い競争をするユーモラスな面もある。

本書は新島の中山道の旅の跡を克明に辿り、新島たちが見たであろう景色を撮った一万枚以上の写真の中から、歴史的かつ芸術的な想像力に基づいて編集したものである。著者の山田興司(おきし)氏は元同志社中学校長で、フリーランスの写真家。学生時代から信州の山々の写真に情熱をかけてきた。その情熱が新島の足跡を辿ることに向かわせた成果が本書なのである。新島の同行者たちの若き日の写真、そして中山道の足跡図も付され、新島と教え子たちがいまどこを歩いているかを繰り返し確かめることができるよう配慮されている。

同行した徳富猪一郎と湯浅吉郎が福島宿で入浴中の新島の前で平伏している、湯浅の戯画までも収録されている。本書のおかげで読者もまた新島真と共に、中山道の旅をさせてもらえる。本書の偉大な功徳である。

北垣宗治 (大学名誉教授)

30年振りの公式写真集
同志社創立130周年記念
写真集「鼓動」刊行

同志社創立130周年を記念して、2年半を費やして制作した写真集「鼓動—Doshisha Album 130th Anniversary—(発行：同志社大学、編集：同志社創立130周年記念写真集編集委員会)を11月29日(創立記念日)に刊行した。四季折々のキャンパスの姿はもとより、ニューヨークのランドの新島ゆかりの地から、4年におよぶ保存修理工事を終え再び姿を現したクラーク記念館まで、同志社大学の「今」を切り取る写真集となっている。公式写真集としては、

同志社創立100周年に刊行された「同志社100年」以来、実に30年振り。

仕様・体裁は、A4判180ページのオールカラー印刷。デラックス版(糸がかり上製本、本クロス装、箔押し題字、カバー付で、税込価格5,000円)と普及版(無綴じ並製本、カバー付で、税込価格3,000円)の2種類。全国各地にお届けできます。

お問合せは

株式会社同志社エンタープライズまで。

TEL 075-251-3027

FAX 075-251-3038

E-mail: info@doshisha-ep.co.jp

